境界線の曖昧化
—Cynthia Kadohata の *The Floating World* における家—
Blurred Boundaries:
Houses in Cynthia Kadohata's *The Floating World*

早川　真理子
HAYAKAWA, Mariko

摘要

This paper will focus on the image of house in Cynthia Kadohata's *The Floating World* (1989), which tells the story of a Japanese American family that has often been kept out of house. The protagonist, 12-year-old Olivia, a Sansei (third-generation) Japanese American girl, grows up in 1950s America with her parents, grandmother, and younger brothers, moving in the country in search of a stable job and house. Later, her family finally acquires a permanent house to live in. However, just as Olivia's consciousness frequently leads her out of the house and she later begins to move out her house and live on her own, this work depicts her ambiguous feeling of wanting to move out again, despite having been allowed into the house. While several previous studies have focused on the protagonist and mentioned the ambiguity of her belonging and identity, they do not specifically highlight the characters' ambivalent feeling toward house. This paper will try to capture the image of house as seen in the eyes of each of the characters, not only the protagonist, but also her grandmother and parents, and will show the meanings of being inside and outside the house. It will also discuss how these issues prompt Olivia to reconsider the concept of inside / outside of the house. Regarding the feelings about house, the Issei (first-generation) grandmother and Nisei (second-generation) parents have conflicting attitudes: while they long to enter, they do not always have positive feelings about doing so due to the issues of gender roles and ethnicity. Olivia, a third-generation girl who has long sought to remain in her house, is also described as having ambiguous feelings toward house. One reason for this seems to be the overlap between the image of her Arkansas house and that of the concentration camps built during World War Ⅱ. Olivia's voluntary departure from her house is closely tied to Isseis' and Niseis' feelings toward the house and solidarity with people belonging outside of the house. While maintaining her connection to the inside of the house, Olivia also acquires a space outside the house in which she can feel safe and comfortable. Such a situation implies that the boundaries that distinguish between inside and outside the house have become blurred.

キーワード：*家、境界線、日系アメリカ文学*
Keywords: house, boundary, Japanese American literature

1．はじめに

「家（“house”）」は一般的に、人々が居住し、日常生活を送ることができる建物のことを指している（*Oxford English Dictionary*）。同じく「家」と和訳される“home”と比較をすると、空間に居住する者の間に心の交流があるかという点（柴田 82）や、「国、都市、村、コミュニティ」というより大きな領域を含むかという点（George 11）、人種の問題が関係しているか（Morrison 3）などの観点から、“house”は“home”[(1)]とはニュアンスが異なる。しかし、どちらも人々が暮らす空間であると認識されている点では一致している[(2)]。そのような家は、これまでモチーフとして様々な文学作品内に登場し、多様な面を保持する存在であることを示してきた。例えば、エドガー・アラン・ポーの「アッシャー家の崩壊」（“The Fall of the House of Usher,” 1839）やユージン・オニールの『楡の木陰の欲望』（*Desire Under the Elms*, 1924）、F・スコット・フィッツジェラルドの『グレートギャッツビー』（*The Great Gatsby*, 1925）の中で家は、そこに居住する人間や、人間関係と同一化されるような存在として描かれている。また、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『ウォールデン』（*Walden*, 1854）や、ウィリアム・フォークナーの『アブサロム、アブサロム！』（*Absalom, Absalom!*, 1936）の中で家は、自己創造のために建てられるものとして描かれている（柴田 77）。さらに、ソロモン・ノーサップの『12イヤーズ・ア・スレーブ』（*Twelve Years a Slave*, 1853）やシャーロット・パーキンス・ギルマンの『黄色い壁紙』（“The Yellow Wallpaper,” 1892）、トニ・モリスンの『ビラヴド』（*Beloved*, 1987）などの作品では、人間を閉じ込める空間としての家が描写されている。

それらの面以外にも家は、家の中/家の外という異なる空間や、人々の間を隔てる境界線を生み出すものとして機能する一面を保持している。家の表象について、現代文学や文化理論、ポストコロニアル小説などを調査しながら研究する Rosemary Marangoly George は、物理的・精神的な“home”という概念は、包括と排除のパターンを含んでいることを述べている（George 2）。彼女によると家は、同じ「血筋、人種、階級、性別、宗教」の人々を選択的に包括するという、全ての人にとって平等であるとは言えない空間である（George 9）。そして、家は差異を生み出す方法であり、「必ずしも広く開かれた腕ではなく、閉じた扉、閉じた国境、選別装置によってつくり上げられた」（George 18）排他的な空間である。本稿では、このような中と外との区別を生み出す家のパターンに注目をしていきたい。

本論文で取り上げるシンシア・カドハタ（Cynthia Kadohata, 1956–）の *The Floating World*（1989）の舞台である 1950 年代のアメリカは、「家」のテーマと密接な関わりを持っている。その時代、

アメリカでは、主に「建築業、自動車産業、軍事産業」の著しい発展によって経済が成長・繁栄し、人々の生活水準が上がった(町田 13)。そのような時代に、第二次世界大戦から戻った兵士たちや中産階級に属する人々は、「都市部の騒音・雑踏から抜け出し自然に接近すること、子供にとって適切な環境を整えること、政治的発言力を持てる地域社会を形成すること、同じ価値観をもつ同年齢の人たちと交流をはかること」という、「家族の絆を重視」した日常生活(町田 14)のために、郊外にある一戸建ての家に住むことを望むようになり、多くの人々がこの時期に安価な価格で住宅を購入することができた(有賀・能登路 18)。

その一方で、日系アメリカ人はしばしば家の中に入ることができず、家の外へと締め出されてきた歴史を持つ。例えば、1913 年に成立した外国人土地法によって、当時「帰化不能の外国人」とされた日系一世の人々は、土地を購入して所有することや、土地を相続することを禁止された。また、1920 年の法案によって、「未成年者の財産後見人になること」も禁止された(植木 ix)。さらに、第二次世界大戦が勃発すると、1942 年にフランクリン・ルーズベルト大統領によって発令された行政命令 9066 号によって、約 12 万人もの日系アメリカ人は「西海岸の家を追われ、カリフォルニア、アイダホ、ワイオミング、ユタ、コロラド、アリゾナ、およびアーカンソー州に作られた内陸部の強制収容所」(ベフ 119)に強制的に移動させられた。彼らは収容されている間、「土地や家、家財など」の保障を何も得ることができなかったため(植木 x)、1945 年に戦争が終わった後も、元の家に戻れなかった場合が少なくなかった。

家の中と外という関係を考えた時に、家の外へと締め出されている様子が読み取れる文学作品やエッセイとして、強制収容所への移動が描写されるヨシコ・ウチダ(Yoshiko Uchida)の『荒野に追われた人々:戦時下日系人家族の記録』(*Desert Exile: The Uprooting of a Japanese American Family*, 1982)やシンシア・カドハタの五作目である『草花と呼ばれた少女』(*Weedflower*, 2006)、また、デイビッド・マス・マスモト(David Mas Masumoto)の“Belonging to the Land”(2011)などがある[(3)]。“Belonging to the Land”というエッセイでは、日系三世であるマスモトの祖父母や両親が、外国人土地法や第二次世界大戦時の強制的な移動によって自身の家と農地を持てなかった状況が説明されており、そのような日系アメリカ人の状況と、メキシコ系アメリカ人農業労働者の一家が定住できる家や仕事を持てない様子とが、結び付けられて語られている。

このような作品と同様に、*The Floating World* もまた、家の外に出され、家を持てずにアメリカ内を移動し続ける日系アメリカ人家族の物語を描くものの、異なる部分も描写している。主人公である日系三世、12 歳のオリヴィアは、1950 年代のアメリカで、安定した仕事を求める両親と祖母、三人の弟たちと共に、オレゴン州を出発し、様々な州に立ち寄りながらアーカンソー州へと車で移動をする中で成長していく。その様子が、過去を振り返るオリヴィアの視点から語られている。その後、オリヴィアと彼女の家族は、アーカンソー州で、定住できる家を手に入れる。先述した日系アメリカ人の歴史や、日系アメリカ人作家による作品と比べると、彼らが家を手にしたことは家族皆にとって良いことのように思われる。しかし、オリヴィアの意

識は頻繁に家の外へと向かい、高校を卒業すると同時に、一人でカリフォルニアへと移動を再開させる。このように、本作品は、家の中に入れたにも関わらず、再度外へ出たいという両義的な心情を描いている部分において、先述した作品とは異なっている。

本作品を論じた先行研究の中には、主人公オリヴィアの曖昧性に言及しているものがある。例えば、帰属やアイデンティティの問題に焦点を当てる Jopi Nyman は、オリヴィアが中間的な第三の空間に位置していることや、ハイブリッドなアイデンティティを受け入れる人物であることを指摘している。また、女性によって書かれた文学作品において、移動や空間が語られることの意味について考えを巡らせる Alexandra Ganser は、オリヴィアが公的な場と私的な場の間の部分を作り出し、自分の必要性に応じてそれらを利用する力を保持していることを述べている(Ganser 217)。しかしながら、それらの先行研究は、登場人物における、家についての両義的な心境にとりわけ焦点を当てたものとは言い難い。したがって本論文では、*The Floating World* の中で、オリヴィアだけでなく、祖母や両親それぞれの登場人物を通して見えてくる家のイメージを捉え、家の中と家の外について考えることで明らかになるジェンダー役割や民族性の問題を示す。そして、そのような問題が、日系アメリカ人三世である主人公に、家の中と外という概念の捉え直しを促していることについて考察する。

2. 祖母と両親における家のイメージ

アジア系アメリカ文学研究者である Sau-ling Cynthia Wong は、強制収容を主たる対象として、日系アメリカ人には家を手に入れることの不可能性が歴史的に付きまとっていることを述べている (Wong 136)。*The Floating World* でも、多くの日系アメリカ人と同様に、日系一世であるオリヴィアの祖母と二世である母親、養父の三人はそれぞれ自身の家を追われ、移動を強いられてきた。本作品で描かれる彼らが頻繁に使用する車は、家として捉えられるという見方もある(4)。しかし、車もまた水回りを欠く不完全な家に過ぎないため、一家はよりよい家を求めて移動を行う。彼らは帰属できる居場所を求めてさまようが、その一方で、家の中へ入ることに対して肯定的な印象のみを抱いているわけではないようにも思われる。

まず、一世の祖母ヒサエにとって家は、アメリカに帰属できる空間であると同時に、女性が留まるべきとされる場所を意味している。彼女は若い頃に家族と共に日本からアメリカ本土へと渡り、父親と叔父がお金を出し合い購入したサンフランシスコの下宿屋で過ごした後、その下宿屋を引き継ぐことになる。ヒサエの父親と叔父の二人によって下宿屋が購入されていることからは、その時点では日本人移民における土地や家の購入が可能であったことが読み取れる(5)。また、この場所でオリヴィアの母親マリコを出産し、日本人の農業季節労働者を客とする下宿屋として家を所有することができていたヒサエの様子からは、この段階では、彼女がアメリカで不自由の少ない暮らしを送ることができていたことが推測できる。

しかし、ヒサエたちの家は永久的な存在としては描かれておらず、年が経つにつれて、物理的に徐々に崩壊していく。

> Meanwhile the house was falling apart, shifting in the ground. There are the sounds the house made: tick-tocking in the walls; thunder from below the floor; squeaks, scrapes, and groans from above. Sometimes as you lay in bed you might hear a plunk as a piece of the ceiling fell to the floor. Sometimes a piece of the ceiling might fall in bed beside you. (29)

このように、音によって徐々に家崩壊の危機が知らされる中、家族皆は為すすべなく、ただ「肩を寄せ合い抱き合いながら」泣くことしかできなかった（28)。家を修繕するための十分な資金が手元にないことは、農作物の収穫期になるとほとんどの客が出ていってしまうという安定とは言えない経営状況から読み取れる。

そのような中でヒサエは家を手放し、家族と共にハワイへと移動する。彼女がアメリカ本土で再度家を手に入れることができなかったことは、「帰化不能（市民権取得不可）の外国人はこの国の不動産を所有することはできない」とする 1913 年の外国人土地法（タカキ 183）と、その後 1920 年の外国人土地法修正法案と結びつくと考えられる。これらの土地法制定によって帰属できる場所を失い、またアメリカ市民権を保持していない彼女には、土地法が制定されなかった州の一つであるハワイへと移動する他に、家を所有するという望みを持てる選択肢はなかったのであろう[(6)]。

しかしその一方でヒサエは、アメリカへの帰属を求めてはいても、家の中に入りたいという思いを全面的に抱いているようには考え難い。そのような心情は、彼女が日系一世の女性であることと関連している。日系一世女性は、強い意志を持ちながら労働を行い、決して「受け身の従属的存在」として一括りにすることはできない人々である（島田 9)。しかし、戦前、彼女たちの多くに期待された役割は「家庭を営む良妻賢母であること」であり、彼女たちは、「誰かの夫人となることで集団の中での自分のアイデンティティや居場所をつくる場合が多かった」（北川 101)。オリヴィアが祖母について、「日本の女たちは主人がいなければなんの価値もない。おばあさんは無意味な人間になりたくなかったのだろう」(6) と考える箇所からは、ヒサエも多くの一世女性と同じ考えを持ち合わせていることが読み取れる。しかし、生涯三人の夫を持ちながらも他に 7 人の男性と付き合い、葉巻をふかしながら「主人が死んで涙を流すような奴隷がいるかい？」(5) と告げるヒサエは、日系一世女性のステレオタイプとは異なる面も保持している。彼女は晩年、自発的ではないもののオリヴィアたちと共に旅を続け、モーテルで亡くなる時まで固定された家の中に留まることはない。このようにヒサエは、家の中への望みを持ちながらも、家の外にも意識が向いている人物として描写されている。

次に二世の両親に注目をすると、両親にとって家はアメリカに帰属することができ、子ども

たちに「落ち着いた暮らし」を与えられる空間である(43)。彼らの考えが一致していることは、「今度はとうさんもかあさんの心のうちを理解したようだった。『アーカンソー州に行かねばならないんだ。彼ら[子供たち]に落ち着いた暮らしをさせよう』」(43)という箇所からうかがえる。しかしながら、定住を求める一方で、彼らはそれぞれ異なる理由から、家の中に良い感情を抱いてはいないように思われる。

オリヴィアの母親マリコは、サンフランシスコの下宿屋で生まれ、まもなくその閉鎖に伴いハワイへと移住する。その後、第二次世界大戦時には強制収容所に入れられた経験を持つことが作中で暗示されている(渡辺 78)。さらにアメリカ本土でもヒサエに伴って複数回の引越しの経験を持つ彼女には、「自分がなぜそこにいるのかはっきり思い出せない」ような、帰属に関わる戸惑いの表情が張り付いている(6)。彼女の戸惑いは、アーカンソー州で家を手に入れた後も無くなってはいない。そこには、ステレオタイプから逸脱しているものの日本人女性の感覚も持ち合わせている祖母ヒサエの意向で強制的に家庭に入ることになったという出来事や、家の外で働くことが叶わないという女性としての戸惑いが結びついている。したがってマリコは、長い移動の末に帰属できる空間を持てたのだが、その家は彼女にとって魅力的なものとはいえない。

一方で、オリヴィアの養父チャーリー・オーは、若い頃はロサンゼルスのリトル・トーキョーで暮らしていた。しかし、第二次世界大戦が勃発し、アメリカ軍の一員として戦地に赴いている間に、家のあったリトル・トーキョーはゴーストタウンへと変貌してしまう。戦後、彼は妻や子どもと共に移動をし、知り合いの借家やモーテルに滞在しながら、臨時の仕事を行う日々を過ごす。その状況下で、アーカンソー州での自動車修理工場経営の仕事が決まり、ついに安定した職と家を手に入れる。

長い間アメリカ内で家という居場所を求めてきたチャーリー・オーが経験してきた肉体的・精神的な苦労は、「驚くほど肉厚で黒い」という彼の手の見た目(119)や、“When I'm fixing a car, or, say, working in the garden for hours, my hands become what most people's hearts are. They feel for me. That's a trick I learned in the army, how to let my hands feel for me. So *I* don't have to feel anything.” (120 強調は著者のもの)という、戦時中から続く彼の手への思いを通して描かれている。日系アメリカ人が第二次世界大戦前後のアメリカで暮らしていくためには、無感覚にならざるを得ないほどの苦痛が伴ったという状況が示唆されている。しかし、アーカンソーに定住後、徐々に賭け事にのめり込み、家から頻繁に外出するようになるチャーリー・オーの様子は、家を手にしたにもかかわらず、社会に帰属しているという感覚を得られない状況を明らかにしている。日系人男性と賭け事について、ロナルド・タカキは彼の著書で、日系一世男性の労働者が、アメリカでの差別や貧困を「賭け事に集中することで忘れようとした」状況を説明している(タカキ 170)。またヒサエ・ヤマモトは、「茶色の家」の中で、仕事が上手くいかず、賭け事に頼らざるを得ない日系アメリカ人男性を描写している。多くの日系アメリカ人男性の姿と同様に、チ

ャーリー・オーもまた、白人が多い地域で日系人として常に周りに気を配り、家から追放される恐怖に怯えているという民族的理由が原因で、賭け事のために度々家の外へ出かけるという選択肢に辿り着いているようにも思われる(179)。

日系一世のヒサエや日系二世であるマリコとチャーリー・オーが移動の中で求めてきた家は、アメリカ社会への帰属や、安定した暮らしという希望が詰まった空間である。しかし、彼らの描写からは、家へと入りたいと願う一方で、ジェンダー役割や民族性の問題によって家に対して良い感情のみを抱いているわけではないという、家への相反する態度が読み取れる。

3. オリヴィアにおける家のイメージ

養父の仕事探しに伴って、特定の家に落ち着くことのない生活を送ってきた日系三世のオリヴィアもまた、家に対して曖昧な態度を抱いている。12 歳のオリヴィアが、以前から様々な州へと車で移動する日々を過ごしてきたことは、彼女が覚えている最初の記憶が、街灯に照らされた電線や、曇った空にたたずむ工場群などの素早く移り変わる風景(55)であることから分かる。彼女は後に、両親と共にアーカンソー州の家での定住を経験するものの、家から出てカリフォルニアへと一人でさらなる移動を行う人物として描かれている点で、祖母や両親とは異なっている。そのようなオリヴィアからも、家に対する相反する心情が読み取れる。

オリヴィアにとって家は、社会に帰属している安心感を得られると同時に、アイデンティティ形成に関わる空間である。アーカンソー州までの旅の中で、固定的な家や家の中の空間から離れた場所に置かれている彼女が、時折、一つの場所に「落ち着きたい、馴染みたいという憧れを抱く」様子は、作中に描かれている(Grindstaff 40)。例えば、オリヴィアが、過去の記憶が徐々に薄れていくような流動的な生活の中で、社会に属していないために、記憶を留めておくことも、一度立ち止まり新たな情報を得ることも難しい自身の状況に不満を抱いている場面がある。それは、彼女がかつて滞在していた借家のペンキの色について思い出せなくなっていることや、情報不足で、心の中に浮かんだ疑問が解決されないことに苛立ちを覚えている次の場面である。

> I would need to acquire some fact or understanding or bit of knowledge, and felt I would die without it. It could be anything. I might need to see a house we'd lived in whose color I'd forgotten, or I might have seen a dead sparrow and want to know how long sparrows usually lived. Sometimes I got so upset if I couldn't know what I wanted that I think my parents were scared – I even felt scared myself at how hysterical I became. (35)

心理学者エリク・H・エリクソンは、オリヴィアのような根を張ることが困難な状況下に置かれ

た人々は、「認知されたい、根源的な望みを得たいという目的のため」や、「アイデンティティが死産してしまうという根源的な恐怖のため」に退行を引き起こす可能性があることを述べている(エリクソン 89)。ここから、記憶の消失や情報の不足からもたらされる、「両親や自分自身を恐れさせるほどの」彼女の苛立ちや取り乱しの行動は、移動を続けることでアイデンティティがスムーズに形成されないという不安と関係していると考えられる。そのような不安な心情の中で彼女は、自身のように定住していない人々はいつも気を引き締めていなくてはならないことを述べている(57)。

また、両親が十分なお金を稼ぐ間の数ヶ月間、里子として滞在した、養父の知人イサムの家での出来事が回想される場面には(15)、両親に会えない寂しさなどの暗い心情と同時に、「法のもとの平等」と書かれた壁掛けが掛かる彼の家に馴染み、「平和なひととき」(14)を過ごした彼女の様子が描かれている。さらに、アーカンソー州の家に定住後、その地に滞在する日本人移民との結びつきを感じ、地域に根を下ろしていることへの安心感を一時的に抱く様子は(78)、オリヴィアが家の中へ留まることを長い間求めてきたと同時に、家の中へ入れたことに肯定的な感情を抱いていることを表している。

一方でオリヴィアは、家に入ることに対して良い感情のみを抱いているとは言い難い。その様子は主に、アーカンソー州定住以降の場面に表れている。当時アメリカ南部の州では養鶏業が急成長しており(Cha 131)、作中にはアーカンソー州で雌雄鑑別師として働く多くの日系アメリカ人の姿が描かれている。特に、1930 年代初頭にヒヨコの雌雄鑑別法が日本で発明されたことが有利に働き、日系アメリカ人は、第二次世界大戦後もその分野で重要な役割を担ってきた(Grindstaff 35)。そのような背景があるものの、日系人は、白人のアメリカ人とは相容れない、異質で危険な存在としてみなされていた(Azuma 245)。

作中では、オリヴィアが、白人の人々が多く暮らすアーカンソー州、ギブソンの町で、よそ者を見るような視線を送られ、いつもおとなしくしていなければならなかった様子が語られている(60)。また彼女は、賭博を行った日系人として町から追放される恐怖に怯える養父の姿を目撃している(113)。ここから、オリヴィアと彼女の家族は家の中の空間に入れたものの、アーカンソー州の社会に十分に属せてはいないことが読み取れる。さらに彼女は、その地域の日系コミュニティにも完全に帰属できているとは考え難い。それは、彼女がアルバイトをする孵化場の仕事場において、白人雇用主が決めたルールの下で、日系人同士が競い合うことを強いられながら働かされているという状況と結びつく。その環境下でオリヴィアは、他の日系人と自身について、同じ民族であってもよそ者同士であるように感じてしまう(101)。

作品中における、オリヴィアが住むアーカンソー州の家のイメージは、第二次世界大戦時に、多くの日系アメリカ人が暮らした強制収容所のイメージと重なる部分を保持している。日系アメリカ人は当時、収容所の敷地内に建てられた簡素なバラックに家族ごとに割り振られ、居住を強いられた。人々が住む場所であり、家族が暮らす場所であるという点においては、収容所

内の居住空間は家のように捉えられよう[7]。しかし、その小屋に住むとしても、彼らはアメリカ社会からは隔離された存在であり、収容所の内側に銃が向けられ、白人の巡査が巡回する中での不自由な生活を余儀なくされた（Okubo 60）。さらに、シンシア・カドハタの五作目である *Weedflower* の作中には、収容所内で日系人同士が敵対する様子が描写されている（131）。

オリヴィアは、肯定的に捉えられない面を保持する家から離れ、孵化場で働く日系アメリカ人トシやノリ、カズオ、また、今では自動車修理工場で働く彼女の養父それぞれが経験してきた日系アメリカ人としての苦悩から解放されることを求め始める。

> My family had lived many places, and traveled many places. I thought then that Arkansas was the most beautiful place I had ever been in, yet I wanted badly to leave, and I knew that, unlike Toshi and Nori and Kazuo – and even my father, committed now to his garage – someday I would have that freedom. (110-11)

「アーカンソー州は、これまで暮らしてきた中で最も美しい場所だと思った」という部分のように、オリヴィアは、定住できる家がある場所、また家の中で暮らすことに対して肯定的な気持ちは抱き続けている。しかし、「それでも私はひどく去りたかった」という箇所からは、そのような心情と同様に、またそれ以上に、家を出る必要に迫られている様子が確認できる。

さらに、思考面だけでなく、行動面でも徐々に家の外へと向かい始めている。

> I decided to sleep that night on the small couch in the living room rather than in my bedroom. The front part of the living room, where the couch sat, was surrounded on three sides by windows, so there was a constant breeze. Sometimes I slept there because I wanted to feel separate from my normal life yet protected within it. It was like how when we first moved here I used to sneak out at night and wander in the small woods back of the house. The brilliant Arkansas night sky made me feel wild and displaced, like an animal child. Once, I managed to catch an owl in my hands. That's the way it was sometimes; we had a television inside, and a radio, but fires and birds and trees were what saturated my life and made it real. Yet even in the woods I felt safe, knowing my house was right there. (71-72)

この引用箇所には、オリヴィアが、隙間風が入る窓際という外に非常に近い場所や、森という屋外に居場所を見出している様子が描写されている。家の外の空間は、彼女に周縁化された感覚を呼び起こすものの、同時に、満たされていて、安心できる場所でもある。そしてこの箇所以外に、林に毛布を抱えて入ることを試みる様子（112）や、飼育する多くの虫と共存して暮らしている様子が描写されていることからも（109）、彼女の意識が家の外の環境へと向いているこ

とが読み取れる。しかし、引用部分に書かれている“…I wanted to feel separate from my normal life yet protected within it”という箇所からは、彼女自身、完全に家の外へと切り離されたいわけではなく、家の中という空間で得られる良い面も保持していたいという、家に対する曖昧な心情が読み取れるのである。

4. オリヴィアのさらなる移動と境界線の捉え直し

家に対して曖昧な心情を抱くオリヴィアは、高校卒業後に家を出て、一人でバスに乗りカリフォルニアへと向かうが、それは彼女がどこにも帰属できなくなるということではない。自発的に家から出て、活気ある大通りに希望を見出し、「論理や現実から解放された」幸せな気分を感じる(135)オリヴィアの様子は、日々の束縛から離れて、「しばしば社会的・政治的な抗議の形」を取りながら(Primeau 15)、自身を「再定義するための自由を求めて」(Primeau 15) 冒険に繰り出すというロードナラティブのイメージを彷彿させる。しかし、彼女が家の外へ出ることは、Ruth Ozeki の著書 *All Over Creation* の中で、主人公の少女が父親に抵抗し、夜明け前に忍び足で家から出ていくような、家の中へ反発心を抱いているということとは異なっている。また彼女は、見知らぬ人々が多い外の空間[8]で、どこにも帰属できず排除されている感覚を抱いているのではなく、反対に、周りにいる人々との結びつきを感じ、安心感を得ている。

まず、オリヴィアが家の中に抵抗を示しているとは限らないことは、家の中に留まる彼女の家族との関係が良好であることから判断できる。オリヴィアの祖母や両親は、彼女と同じく家に対して曖昧な感情を抱いてきた。養父チャーリー・オーは、家を手にしたものの安定した社会的地位を得られていないという自身の状況には、日系アメリカ人であることだけでなく、十分な教育を受けられなかったことも関わりを持つと感じている。そのため、家から出て大学に通う予定であるオリヴィアを誇らしく思っている(119)。また、同じく二世であるチャーリー・オーの友人も、オリヴィアの送別会で「大学万歳」と言いながら、アーカンソー州からカリフォルニア州への、彼女のさらなる移動を喜ぶ様子を見せている。さらに、母マリコは、家の中に留まることを美徳とする女性の役割に苦悩を抱えてきたが、そのような役割をオリヴィアに強いるような人物として描かれてはいない。むしろ彼女は、大学へ行き、実存主義に関する本を読み知識を付けることを勧めている(115)。このように、オリヴィアの家族や周りの人々それぞれがオリヴィアの将来に希望を見出し、彼女を家の外へと送り出している様子が読み取れる。このことから、一世や二世のこれまでの経験や心情が、三世であるオリヴィアの自発的な移動を可能にさせているといえる。

次に、オリヴィアは、家の外の空間で、社会から完全に切り離されている疎外感を感じているわけではなく、周りにいる人々との繋がりの中で安心できる場所をつくり上げている。オリヴィアは家の外で、彼女と同じように「家と家でない二つの世界の間に位置している」(Nyman

154)様々な人々に出会う。例えば、カリフォルニアへと向かうバスの中では、オクラホマで一人暮らしをしているという少年や、スウェーデンから来た移民の夫婦、すでに社会から退いている元沿岸警備隊員らと会話をし、ジュースや本、ガラスのおもりなどの贈り物を受け取るというその場限りの交流が描写される。また、彼女が仮住まいをするロサンゼルスのアパートは、ハリウッドを夢見て一時滞在をする音楽家たちの存在が身近に感じられる場所であり、その空間に対して、次のように安心感を抱いている。

> But I liked where I lived. It gave me that old feeling of being displaced and safe at the same time, like when I used to play in the small woods back of my house at night. I could close my eyes and from any point at the edge find my way to a certain tree in the center. (126)

オリヴィアは、この場所においても、周縁に置かれているが安心できるという、アーカンソー州に滞在していた期間に見出したものと同様の感覚を覚えている。また、引用部分に書かれている“the small woods back of my house”は、次のように、家族と過ごした思い出と結びついた場所でもある。“Evenings, we might take quilts into our backyard. Sitting beneath the Milky Way, we talked of everyday things – friends and meals and work. Other nights we sat silently. On those quiet nights, we would sit within a few feet of each other, but we each felt free to dream as we pleased.” (121) この引用文からも、それぞれが異なる考え事をしているという、離れているが、安心できるという感覚が読み取れる。このようにオリヴィアは、家の外の空間で暮らしながらも、家族と一緒にいる時に感じられるような安心感も求めている。

さらにオリヴィアは、カリフォルニアで特に親しくなるアンディ・チンという中国系アメリカ人青年との関わりを通して、家の外における居場所を見つけ出している。一時的な仕事で生計を立て、中国系コミュニティに十分に帰属できているようには見えない彼は(140)、日系人コミュニティの周縁に位置すると同時に、さらに周縁へと移動し続けるオリヴィアと共通点の多い人物である。オリヴィアはその彼に対して相反する感情を抱いている(Yoshida 62)。例えば、彼女は最初、自動車を修理する仕事を持つ養父とは対照的に、保険金目的で自動車を壊すという、不安定であり犯罪行為でもある仕事に就いているアンディに恐怖心を抱く。しかしその反面、“I liked knowing about this secret world .... Hanging around with Andy was probably a bad choice, but I really liked him.” (129)のように「アンディの好奇心旺盛だが逸脱した生活に魅了されている」(Yoshida 62)。またオリヴィアは、休暇で訪問するオレゴンコーストで船に乗る際、そのまま世間から切り離され沖へ流されたいという衝動に駆られるが、その直後、“The second thing that occurred to me, for no reason, was how in the boat I couldn’t have floated out if I’d wanted to, since Andy and Walker were watching, protecting.” (144)のように、アンディや、弟のウォーカーが彼女を見守ってくれていることが頭をよぎり、思い止まる。ここから、家の外がオリヴィアに

とって安らぐ空間になっている理由の一つとして、アンディとの繋がりがあることも挙げることができる。著者カドハタは、安心できる居場所について、“Safety is produced through making human connections. This is maybe the whole point I'd like to make in my writings” (Lee 173)と述べている。そして彼女は、人と人との繋がりの中でも、とりわけ「マイノリティの立場にある人々と」共感することに焦点を当ててきた作家である(桧原 69)。そのようなカドハタはこの作品内でも、オリヴィアを通して、主流社会への帰属や同化を目指して家の中へ入ることだけを望むのではなく、家の外にいる人々同士で連帯しながら、自身の居場所をつくり上げていくことを促している。

このように、家の外においても、家の中との繋がりを維持すると同時に、家の外にも安らぐ空間を手に入れることが可能になるオリヴィアの様子は、家の中/家の外という異なる空間が曖昧になっていることを示唆している。これは、カルチュラル・スタディーズの研究者であるNicole Schröderが著書内で述べる、境界線は「通れない、あるいは変えられない制限」ではなく、絶え間ない変化や、開放性を持った空間へと導くものであるという主張(Schröder 47)と結びつく。オリヴィアの祖母や両親における家にまつわる境界線は、決して流動的なものではなく、彼らは、家の中と外それぞれの空間が二重の意味を持つ中で、自身の居場所を自由に選ぶことが困難であった。しかし、家に対する彼らの相反する心情が、オリヴィアの家からの自発的な移動を可能にし、彼女の境界線の変容へとつながっているといえる。

5. おわりに

本論文では、シンシア・カドハタの *The Floating World* における家のモチーフに注目をし、家に関するアンビバレントな態度について考察をしてきた。最終的に、日系三世であるオリヴィアにおける家の中/家の外という異なる空間が曖昧になっている状況は、同じく三世である著者カドハタが、自身が帰属する場所について、「子供時代、家族、そしてアメリカの風景」(“On Finding a Home” 117)であると述べていることを思い起こさせる[(9)]。この記述は、彼女が、家の外においても自身の居場所を発見できていることを物語っている。

しかし、作中で人種を特定しない季節労働者の姿が何度も描写され、「過ぎ去ったばかりの厳しい暮らしから、さらに厳しい暮らしへと移っていく」(149) と記述されている部分からは、オリヴィアの祖母や両親、そしてオリヴィア自身が直面してきた家にまつわる境界線の問題が、民族や時代を超えて続いていくことが示唆されているように思われる。

カドハタは本作品を通して、家に織り込まれた意味や歴史を再度考えることを問いかけ、多くの人々が歴史や他者との繋がりを保持しながら、自由な空間の中で、自己をつくり上げていくことの必要性を呼びかけているのではないだろうか。

※本稿は日本アメリカ文学会中部支部例会において発表した原稿「Cynthia Kadohata の *The Floating World* における家のモチーフ」に、大幅に加筆修正を加えたものである。これまで諸先生からいただいた貴重なご教示に感謝申し上げます。

注

⑴ Oxford English Dictionary で“home”は、“The place where a person or animal dwells.”と記されている。

⑵ 本稿では「家」を人が暮らす空間として、“house”と“home”のいずれにも対応するものとして扱う。

⑶ 本文中に挙げた作品の他にも、強制収容所への移動と結びつくものとして、ミネ・オークボ（Miné Okubo）の『市民 13660 号』（*Citizen 13660*, 1946）、ジーン・ワカツキ・ヒューストンとジェイムズ・D・ヒューストン（Jeanne Wakatsuki Houston & James. D. Houston）の『マンザナールよさらば：強制収容された日系少女の心の記録』（*Farewell to Manzanar,* 1973）、ジョイ・コガワ（Joy Kogawa）の『失われた祖国』（*Obasan*, 1981）などがある。また、エレイン・H・キム（Elaine H. Kim）は『アジア系アメリカ文学−作品とその社会的枠組』の中で、ジョン・オカダ（John Okada）の『ノーノーボーイ』（*No-No Boy*, 1957）やヒサエ・ヤマモト（Hisaye Yamamoto）の「ミス・ササガワラの伝説」（“The Legend of Miss Sasagawara”）、モニカ・ソネ（Monika Sone）の『二世娘』（*Nisei Daughter*, 1953）、「ジャニス・ミリキタニ（Janice Mirikitani）、モモコ・イコ（Momoko Iko）、ロニー・カネコ（Lonnie Kaneko）、ローソン・イナダ（Lawson Inada）、ジェームズ・ミツイ（James Mitsui）」（キム 190）などの作家の作品を挙げている。さらに、スタン・ヨギ（Stan Yogi）は、“Literary Works on Incarceration”というウェブサイトの中で、第二次世界大戦における日系アメリカ人の強制収容所と結びつく文学作品について「初期の作品」や 「回顧録」、「日系アメリカ人による小説」や「詩と演劇」などのタイトルに分けてそれぞれ紹介しており、加えて、それらの文学作品リストもまとめている。

⑷ 本作品で描かれる移動する「車」は、「家」として捉えられるという見方もあると考えられる。その理由はまず、車から外へ出て感じる不安は、家の外に出て感じる不安として扱うことができるためである。例えば、オリヴィアが祖母と夜のドライブに出かけた際、彼女は車から外へ出て男性に話しかけた後に、恐怖を感じている(9)。またもう一つの理由として、オリヴィアの両親にとって、定住する家ではなく移動する「家」としての「車」の存在が、不満のはけ口として意味を持つもののように描写されているためである(4)。

⑸ 太田孝子は、論文「排日運動下におけるシアトル穂高倶楽部（Ⅱ）:『写真結婚』と『外国人土地法』を中心に」の中で、「日米紳士条約」直後、カリフォルニアを始めとする様々な州

で暮らす日本人移民は、「次第に自分の土地や家を所有」するようになったと書いている（太田 8）。

⑹ 外国人土地法が成立した州は、カリフォルニア州の他に「ワシントン、アリゾナ、オレゴン、アイダホ、ネブラスカ、テキサス、ルイジアナ、モンタナ、ニューメキシコ、ミネソタ、ミズリー」である（タカキ 187）。

⑺ 収容所内に建設された小屋は簡素なバラックで、収容所の内側へ向いた銃によって常に見張られているという、一般的な家の意味と一致しているとは言い難い空間である。しかし、Miné Okubo は著書 *Citizen 13660* 内で、"'.... How do they [WRA and the army] expect those poor people to leave the one place they can call home.'" (209)のように、収容所と家との重なりを記述している。また、物語中の描写ではあるが、Cynthia Kadohata の著書 *Weedflower* の中には、収容所の小屋の窓にカーテンが掛かっている様子や、小屋の周りに庭や池が造られている状況から、主人公スミコが、強制収容所の小屋を家のように感じるという描写がある（107）。

⑻ 本稿では「家の中」「家の外」という言葉を用いて議論を進めているが、「周縁」という視点からも考えることができ、家の外の空間は、アーカンソー州の家の周縁として捉えられる。

⑼ 著者カドハタもオリヴィアと同様に、幼い頃、イリノイ州からジョージア州、アーカンソー州、カリフォルニア州への数多くの引っ越しを経験しており、それらの州への移動の中で、ハイウェイやモーテル、小麦畑などの風景を身近な存在として感じていた（"On Finding a Home" 117）。

引用文献

Azuma, Eiichiro. "Race, Citizenship, and the 'Science of Chick Sexing': The Politics of Racial Identity among Japanese Americans." *Pacific Historical Review*, volume. 78, Issue 2, 2009, pp. 242-75.

Cha, Frank. "Growing Up in the Margins: Asian American Children in the Literature of the New South." *Southern Quarterly*, volume. 46, Issue 3, 2009.

Faulkner, William. *Absalom, Absalom!: The Corrected Text*. 1936. Random House, 1986.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. Cambridge UP, 1991.

Ganser, Alexandra. *Roads of Her Own: Gendered Space and Mobility in American Women's Road Narratives, 1970-2000*. Rodopi, 2009.

George, Rosemary Marangoly. *The Politics of Home: Postcolonial Relocations and Twentieth-Century Fiction*. Cambridge UP, 1996.

Gillman, Charlotte Perkins. *The Yellow Wall-paper*. 1892. Feminist Press at the City University of New York, 1996.

Grindstaff, Bradley. “Cynthia Kadohata: Growing Up on the Road of the Japanese-American Diaspora.” *Baika Women’s University Faculty of Cultural and Expression Studies Bulletin*, 2019, pp. 33-46.

“home.” Def. 1. *Oxford English Dictionary*, oed.com.

“house.” Def.1. *Oxford English Dictionary*, oed.com.

Houston, Jeanne Wakatsuki, and Houston, James U. *Farewell to Manzaner: A True Story of Japanese American Experience During and After the World War Ⅱ Internment*. Houghton Mifflin, 1973.

Kadohata, Cynthia. “Chapter 10: On Finding a Home.” *Ethnic Literary Tradition in American Children’s Literature*, edited by Michelle Pagni Stewart and Yvonne Atkinson, 2009, pp. 117-21.

---. *The Floating World*. Ballantine Books, 1989.

---. *Weedflower.* Simon and Schuster, 2006.

Kogawa, Joy. *Obasan*. 1981. Anchor Books, 1994.

Lee, Hsiu-chuan, and Cynthia Kadohata. “Interview with Cynthia Kadohata.” *MELUS*, volume.32, Issue 2, 2007, pp. 165-86.

Masumoto, David Mas. “Belonging to the Land.” *Colors of Nature: Culture, Identity, and the Natural World*, edited by Alison H. Deming and Lauret Savoy, 2011, pp.309-18.

Morrison, Toni. *Beloved: A Novel.* 1987. Alfred A. Knopf, 1998.

---. “Home.” *The House That Race Built*, edited by Wahneema Lubiano, 1997, pp. 3-12.

Northup, Solomon. *Twelve Years a Slave*. 1853. Louisiana State UP, 1968.

Nyman, Jopi. *Home, Identity, and Mobility in Contemporary Diasporic Fiction*. Brill Rodopi, 2009.

Okada, John. *No-No Boy*. 1957. U of Washington P, 2014.

Okubo, Miné. *Citizen 13660*. 1946. U of Washington P, 1983.

O’Neill, Eugene. “Desire Under the Elms.” 1924. *Nine Plays, Modern Library*, 1932.

Ozeki, Ruth. *All Over Creation*. Canongate, 2003.

Poe, Edgar Allan. *The Fall of the House of Usher and Other Stories*. 1839. Pearson Education, 2000.

Primeau, Ronald. *Romance of the Road: The Literature of the American Highway*. Bowling Green State University Popular Press, 1996.

Schröder, Nicole. *Space and Places in Motion: Spatial Concepts in Contemporary American Literature*. Gunter Narr Verlag, 2006.

Sone, Monika. *Nisei Daughter*. 1953. Washington P, 2014.

Thoreau, Henry D. *Walden*. 1854. Princeton UP, 2004.

Uchida, Yoshiko. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese American Family*. 1982. U of Washington P, 1984.

Wong, Sau-ling Cynthia. *Reading Asian American Literature: From Necessity to Extravagance.* Princeton UP, 1993.

Yamamoto, Hisaye. “The Brown House.” *Seventeen Syllables and Other Stories*, 1988, Rutgers UP, 2001, pp. 39-45.

---. “The Legend of Miss Sasagawara.” *Seventeen Syllables and Other Stories*, 1988, Rutgers UP, 2001, pp.20-33.

Yogi, Stan. “Literary Works on Incarceration.” *Densho Encyclopedia*, 19 Oct. 2020, https://encyclopedia.densho.org/Literary%20works%20on%20incarceration.

Yoshida, Junko. “Abjection of Horror in Cynthia Kadohata’s *The Floating World*.” *Tinker Bell* (53), 2008, pp. 55-68.

有賀夏紀・能登路雅子編『史料で読むアメリカ史 4：アメリカの世紀 1920 年代−1950 年代』東京大学出版会、2005 年。

植木照代「日系アメリカ人の歴史と文学」『日系アメリカ文学−三世代の軌跡を読む』植木照代、ゲイル佐藤編著、創元社、1997 年、v−xxiii 頁。

エリクソン，エリク・H 著『洞察と責任：精神分析の臨床と倫理』鑪幹八郎訳、誠信書房、2016 年。

太田孝子「排日運動下におけるシアトル穂高倶楽部（Ⅱ）:『写真結婚』と『外国人土地法』を中心に」『岐阜大学留学生センター紀要』第 2000 号、2001 年、3−16 頁。

北川扶生子「日系アメリカ移民一世女性の表象と表現−民族をめぐる葛藤を中心に−」『山邊道：国文学研究誌』第 58 号、2018 年、95−113 頁。

キム，エレイン・H 著『アジア系アメリカ文学−作品とその社会的枠組』植木照代、山本秀行、申幸月訳、世界思想社、2002 年。

柴田元幸『アメリカ文学のレッスン』講談社、2000 年。

島田法子「女性移民史研究をめぐって−動向と課題−」移民研究年報 19 号、2013 年、3−18 頁。

タカキ，ロナルド著『もう一つのアメリカン・ドリーム：アジア系アメリカ人の挑戦』阿部紀子、石松久幸訳、岩波書店、1996 年。

桧原美恵「共感の輪を広げて：収容所体験を描く日系人作家、Janice Mirikitani，Cynthia Kadohata，Rahna Reiko Rizzuto を巡って」『英文学論叢』第 55 号、2011 年、54−77 頁。

ベフ，ハルミ『日系アメリカ人の歩み』人文書院、2002 年。

町田哲司・江尻雅一・片渕悦久編『アイデンティティとアメリカ小説：1950 年代を中心に』晃洋書房、2001 年。

渡辺佳余子「シンシア・カドハタの『七つの月』を読む−日系人の収容所体験を書かない日系三世作家−」『東京成徳短期大学紀要』、2000 年、73−82 頁。